

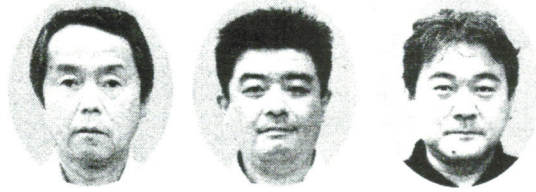
中小、零細の町工場が集まる東京都大田区。ここで金属研磨や人材派遣の4社が、業種の枠を超えて事業を起こそうと奮闘している。もとは「脱下請けプロジェクト」という自主的な集まりが発展して、会社組織のディープロジェクトを立ち上げた。地域の企業群をひとつの会社に見立てた



「チーム大田区」作りを夢見て、様々な試みが動き出している。

「このままでつまらない。何か作ろう」。2008年のある日、自動車配管の継ぎ手部品製造会社、協立工機の鈴木正博社長(60)はそう考えた。同区の企業が母体となる異業種交流会に加わっていたが、18年目

ディープロジェクト (東京)



左から鈴木、大崎、生田の各氏

「チーム大田区」へ会社始動

に映し出す「まわる電子看板」。パネルが360度回転する一風変わった電子看板だ。「メンバーが每晚、遅くまで突貫作業で同年10月の展示会に間に合わせ、第1号を完成させた(鈴木氏)。この電子看板は、都庁が観光地の映像を流す宣伝塔として採用した。その後もメンバーはいくつかの製品に取り組んできた。噴射口が8つ付いて消火面積が広い消防ノズル、大田区に飛び込んできた様々な企業と関わってきた人脈も生かしている。自分たちの製品の販売だけでなく、様々なニーズを受け止めながら大田区の企業で開発も進めたい」。こう語るのは、人材派遣会社エヌエフエーの大崎玄長社長(38)。ディープロジェクトの「社長」を務める。大崎氏は営業役を自任し、つながりの歴史が長いとはいえ、それぞれ異なる業種に従事するメンバーが、引き続き月1回の会議などで顔を合わせる機会は貴重だ。アイデアを出し合い、何ができるか議論する。下請け脱却と一口に言っ

に入り、マンネリ化は否めなかった。この年の8月に交流会メンバーの4人と作ったのが、脱下請けプロジェクトだった。こうした製品の販売を進めようと、昨年10月、脱下請けプロジェクトという会社組織にした。協立工機などメンバーの4社が出資する研磨の生田徹也社長(43)

「このままではつまらない。何か作ろう」。2008年のある日、自動車配管の継ぎ手部品製造会社、協立工機の鈴木正博社長(60)はそう考えた。同区の企業が母体となる異業種交流会に加わっていたが、18年目に映し出す「まわる電子看板」。パネルが360度回転する一風変わった電子看板だ。「メンバーが每晚、遅くまで突貫作業で同年10月の展示会に間に合わせ、第1号を完成させた(鈴木氏)。この電子看板は、都庁が観光地の映像を流す宣伝塔として採用した。その後もメンバーはいくつかの製品に取り組んできた。噴射口が8つ付いて消火面積が広い消防ノズル、大田区に飛び込んできた様々な企業と関わってきた人脈も生かしている。自分たちの製品の販売だけでなく、様々なニーズを受け止めながら大田区の企業で開発も進めたい」。こう語るのは、人材派遣会社エヌエフエーの大崎玄長社長(38)。ディープロジェクトの「社長」を務める。大崎氏は営業役を自任し、つながりの歴史が長いとはいえ、それぞれ異なる業種に従事するメンバーが、引き続き月1回の会議などで顔を合わせる機会は貴重だ。アイデアを出し合い、何ができるか議論する。下請け脱却と一口に言っ